

ケンジとミチコの歴史人名談義

中村雅之

1. ケンジ君の困惑

大学の午後の教室。

ケンジは机に片頬を付けてグラウンドを眺めている。「どうしたの？ そんな格好して」と声をかけたのはミチコだ。彼女は解読オタクで、難しいパズルから古代文字の解読まで、およそ解読に関する本をひたすら読みあさっている。もっとも、そのことを知っているのはケンジの外にはヨシタケ先生だけだ。

「<ワンヤンキイン>って知ってる？」

「ええ。女真文字を作った人でしょう。1119年に金の太祖アクダが彼に文字を作るように命じたのよね」

「うん。その<アクダ>も問題だ」

「も？……<ワンヤンキイン>と<アクダ>に何か問題があるわけ？」

「そう。どうしてそう読むのかということだ」

「……つまり、<完顔希尹>や<阿骨打>をなぜ<カンガンキイン>や<アコツダ>と読まないのかっていうことね」

「通常の日本語の読みでないことは確かだから、可能性は二つしかない。ひとつは、女真人の名前だから女真語で読んだ。でもこれは不可能だね。12世紀の女真語が完全に解読されている訳ではないし、まして人名となると、正確な発音を知るのは大変だ。漢字だけを頼りにおいそれと片仮名で表記できるはずがない。二つめは漢字の表記を当時の中国語で読んだということだ。こちらの方があり得るけど、ちょっとインチキくさい」

「12世紀の中国語の発音って……どうやったら分かるの？」

「専門的にはいろいろと面倒な手続きがあるんだろうけど、概略的には現代北京語の声母つまり語頭子音を少し修正すれば求められる。君、中国語はやったんだっけ？」

「ええ。ラジオ講座を半年聴いたわ」

「十分だ。ピンインで<ji/qi/xi>という表記があるだろう。<ジ/チ/シ>だ。あれは16世紀以前には二系統の異なる音だったのが合流したものだ。ピンイン風にむりやり表現すると、<gi/ki/hi>と<zii/cii/sii>の二系統で、おおむ

ね<ギ/キ/ヒ>と<ヅィ/ツイ/スイ>と理解してもらっていい。それが17世紀から18世紀初頭までに合流して<ジ/チ/シ>つまり<ji/qi/xi>になった。だからこの部分を復元してやれば、ほぼ12世紀の発音に近づく」

「どうやって二系統に分けるの？」

「日本語で読んで、カ行・ガ行なら<gi/ki/hi>で、サ行・ザ行なら<zii/cii/sii>だ。無気音・有気音・摩擦音の関係は変わらない。簡単だろ？」

「つまり<完顔希尹>ならピンインで<Wanyan Xiyin>だから、希<xi>の部分を<hi>にすればいいのね。……あら？<ワンヤンキイン>にならないわ。<ワンヤンヒイン>ね！」

「そう、だからインチキくさいんだ。契丹語じゃあるまいし、<阿骨打>にしたってそうだ。骨<gu>も打<da>も無気音だから、それらを片仮名で濁音表記するという原則に従うとすれば<アグダ>でなければならない」

2. ミチコさんの瞑想

「契丹語じゃあるまいし」というケンジの言葉にミチコは引かなかった。彼女は今契丹語の解説の話に夢中なのだ。概説書には飽きたらずに専門的な論文もいくつか読んでいた。ケンジが言ったのは、契丹語では漢語の有気音の/k'/と摩擦音の/h/が区別なしに同じ文字で表記されていることを指しているのだろう。だから契丹語だったら<ki>と<hi>の混同があるかも知れないが、女真語ではあり得ないと言うのだ。女真語は満洲語の前身というべき言語であり、満洲語では<ki>と<hi>は明瞭に区別される。したがって<完顔希尹>をのほほんと<ワンヤンキイン>と読むことは許されないのである。事実は単純で(というか杜撰で)、漢字音の知識のない者が<ワンヤンキイン>などという奇怪な読みを創作してしまったのだろう、とミチコは想像した。

「その意味では10世紀に契丹文字を作ったと言われる<耶律阿保機>やその弟の<迭剌>もなかなか問題ね」

「うん、でも最近はやリツアホキ>や<テツラツ>という表記も結構多いから、それはそれで適切な日本語読みだな」

「その場合、契丹人は日本語読みで、女真人は中途半端な中国語読みということになって、釣り合いが取れないわね」

「でも<ヤリツアホキ>と<デラ>なんていうのよりはマシだね」

「<保>を<ボ>と読むからには<機>も<ギ>にしるっていうことね。あるい

は<保>も<パウ>とか<パオ>にすべきかしら」

「その点は微妙だね。契丹語はモンゴル語に近いと考えられているから、かりにモンゴル語のような広い<オ>を表すのに<保>の字を用いたとすれば、その点を考慮して<保>を<ボ>としておくことは、やや強引だけど可能かも知れない。それよりも問題なのは、もし<阿保機>の部分で10世紀の中国語に近づけて<アボギ>と読むことにしたら、その前の<耶律>も<ヤリツ>のような日本語風ではまずいということなんだ。当時の漢字音では一般に音節末の<p/t/k>は消えているから<律>は現代音同様に<lü>ということになる。<耶>が当時<ye>か<ya>かというのはすぐには決定しにくいね」

「つまり、当時の中国語に近づけて、なおかつ少しだけモンゴル風の雰囲気も考慮すると、<耶律阿保機>は<ヤルアボギ>とか<イェリュアボギ>になるわけね。<迭剌>を<デラ>とするのはいいの？」

「当時の中国語音を考慮した表記としては問題ない。最近では<テツラ>なんていう仮名を振っているのもあるけど、意味不明だね」

「契丹人や女真人の名前が漢字で表記されていることが問題を複雑にしているのね」

3. ヨシタケ先生の憂鬱

ふと気が付くと、二人の後ろにヨシタケ先生が立っていた。「面白そうな話をしているじゃないか」と、近くに腰掛ける。一体、この先生の本当の専門が何なのか二人ともよく分からない。普段はドイツ語を教えているのだが、中国語やロシア語などメジャーな言語は言うに及ばず、モンゴル語や満洲語にまで手を出していて、授業が終わるといつも様々な言語の質問をしに学生が寄ってくる。ケンジやミチコもよくヨシタケ先生に種々の疑問をぶつけている。今もここぞとばかりにケンジが切り出した。

「先生、前から聞こうと思っていましたんですけど、モンゴルの英雄である初代カーンの名は、<ジンギス>でしょうか、それとも<チンギス>なんですか？」

「それはどういう方針によって呼ぶか、そして何に信を置くかによって異なる」

「方針というのは現代モンゴル語によるか、あるいは当時のモンゴル語音によるかということですね。何に信を置くかというのは、資料のことですか？」

「うん。13世紀から14世紀のモンゴル語の資料は膨大にあるからね。とりわけウイグル文字モンゴル語とパスパ文字モンゴル語、そして漢字音訳モンゴル語、

この三種は欠かせない」

「仮に現代モンゴル語だと、〈チンギス〉ということですか？」

「そうだろうね。伝統的にウイグル文字、さらにそれを少し改良したモンゴル文字では〈cinggis〉と表記されていたから、その伝統的な表記をそのまま読むと〈チンギス〉になる。キリル文字でもそういう表記のようだ」

「当時の発音ということになると、ウイグル文字は清濁の区別には無力だから、資料としてはパスパ文字と漢字によることになりますね」

「そう。それが問題だ。パスパ文字では〈jiggis〉と表記され、漢字では〈成吉思〉なのだ」

「漢字は〈チンギス〉と読めそうですね。つまり、同時代のパスパ文字と漢字で表記が異なっている訳か」

「個人的には〈ジンギス〉の方に傾いているがね。パスパ文字の公的性格は何より重んずべきものだと思うし、……それにオレはジンギスカン鍋が好きだし」(それは関係ないだろ……)と二人は心の中でツッコミを入れた。

「まあ、いずれにしてもモンゴル皇帝の名前は一度専門家たちが集まって、検討してもらいたいものだ。〈モンケ〉は漢字表記〈蒙哥〉による限り〈モンゲ〉の方がいいし、〈オゴタイ〉(〈オゴデイ〉)もパスパ文字や漢字表記によれば少なくとも二文字めは〈ゴ〉より〈コ〉の方がいい。モンゴル人皇帝のことを考えるたびに憂鬱になるよ。あれほど世界史に名を残した英雄たちを我々は何と呼べばいいか迷っているんだから」

憂鬱になるよ、と言いながら立ち上がり、その言葉とは裏腹に、軽快な足取りでヨシタケ先生は帰っていった。

教室に残された二人は、英雄たちに思いを馳せながら、夕映えに照らされたグラウンドをしばし眺めていた。